D-9　日本語における助数詞を含む解釈が義務付けられた省略

松本　大貴[1, 2]

[1]京都大学大学院 人間・環境学研究科・[2]日本学術振興会

要旨

本稿は，先行研究では見過ごされてきた，日本語の名詞句拡大投射内における省略について考察し，理論的な説明を与えることを目的とする．具体的に，名詞句の拡大投射が関わる省略では，省略領域に助数詞を含む読みが強制的に排除される場合と，逆に，省略領域が助数詞を含む読みが義務付けられる（あるいは，可能になる）場合があることを見る．その上で，特に助数詞を含む読みが可能になる場合に的を絞り，関連する先行研究を概観し，それらでは当該の現象を説明できないことを確認する．その上で，代案としてReinhart (2006)のReference-Set Computationを用いることで，当該の現象を説明できると論じる．最後に，助数詞を含む読みが排除される例を概観し，本分析がもたらす理論的利点についても簡単に述べる．

1.　導入

本稿では，日本語の名詞句内の自由な語順に関連した事実で，これまで注目されてこなかったデータを指摘する．さらにそのようなデータを説明しうる先行研究を２つ比較し，そのどちらも不十分であることを見た上で，代替案を提案する．

日本語の名詞句の特徴として，(1)に見られるように，語順の自由度が挙げられる．

(1)　a.　太郎はキングの本を３冊買った．

　　b.　太郎はキングの本３冊を買った．

　　c.　太郎は３冊のキングの本を買った．

　　d.　太郎はキングの３冊の本を買った．

続いて，以下の(2)を見られたい．(1)の各文のそれぞれを先行文として受けた時，(2)に見られる，省略を伴う表現が持つ意味には，一定の制限が存在することがわかる．

(2)　花子はサリンジャーのを買った．

(1a–c)を先行文として受けた場合，(2)は「花子はサリンジャーの本を３冊買った」として解釈できない．それに対し，(1d)が先行文となっている場合は，逆に「花子はサリンジャーの３冊の本を買った」という，助数詞を含む読みが義務的になる（筆者には，助数詞を含む読みが義務的になるように思われるが，話者によっては助数詞を含む読みは可能だが困難だとする場合もある．このようなヴァリエーションについては，第４節で考察す

る）．この事実は，これまでの先行研究では注目されていない．一体なぜ(1d)を受けた場合のみ(2)は助数詞を含む読みだけが義務的（可能）なのか．

2. 先行研究

先行研究では，Maeda and Takahashi (2016, 2017)が，(2)のようにNPが省略された名詞句は，Merchant (2001)のE(llipsis)-feature（補部の省略を要求する素性）を持った軽名詞*n*である「の」とその補部NPが併合した結果だとし，(3a)の構造を提案している．また，Hiraiwa (2016)では，前田と高橋の*n*はpro-formであり，その補部には削除されるNPではなく*n*の特性を指示する修飾詞が併合する，(3b)の構造を提案している．

(3) a. [$_{DP}$ サリンジャーの [$_{D'}$ [$_{\#P}$ [$_{CLP}$ [$_{nP}$ ~~[$_{NP}$ 本]~~ の$_{n}$] 冊$_{CL}$] 3$_{\#}$] D]]

b. [$_{DP}$ [$_{\#P}$ ３冊の [$_{nP}$ サリンジャーの の$_{n}$] #] D]

(3)のどちらの構造でも，省略あるいは代名詞化の対象は名詞の根であり，助数詞「３冊」は省略の対象にはなっていない．つまり，(3a)では，E素性によって省略されるのは「本」のみであるし，(3b)では，代名詞「の」の投射は*n*Pであり，助数詞が生成されるCLP（と#P）はその拡大投射であるため，その性質上，助数詞は代名詞化を受けない．これらから，(1a–c)を先行文とした時の(2)の解釈は適切に捉えられる．しかし，(1d)が先行文となった場合の(2)の解釈は，想定する構造の特性上，説明できない．

以上から，これらの先行研究による分析では，第１節で概観したような事実に対して，包括的な説明を与えることはできないことが確認された．具体的な代案を提示する前に，次節では，本稿の分析のベースとなるReinhart (2006)のReference-Set Computationとそれを用いた奥 (2008)について概観する．

3. Reinhart (2006)のReference-Set Computation

Reinhartは，焦点投射（focus projection）を用いた，インターフェース条件に主眼を置いた興味深い提案をしている．彼女は，Szendrői (2001)に従い，無標の主強勢（main stress）は文中の最も深く埋め込まれた要素に与えられると想定する．例えば，(6)では，最も深く埋め込まれた*guitar*に無標の強勢が与えられる．

(6) Allan Holdsworth is playing the **guitar**.

さらにReinhartは，このような音韻的主強勢をベースに，意味・談話解釈における焦点（focus）を決める規則を提案している．その規則によると，派生の主強勢を含む全ての構

成素，そしてそれらの構成素のみが焦点集合の要素になる．そのため，(6)の焦点集合は(7)のようになる．

(7)　{the guitar, is playing the guitar, Allan Holdsworth is playing the guitar}

これらより，(7)が以下の文脈で使用可能であることが導ける（焦点要素を$[_F\ ]$で表す）．

(8)　a.　What's that noise?
　　b.　What's Allan Holdsworth doing?
　　c.　What is Allan Holdsworth playing?
　　d.　$[_F$ Allan Holdsworth is $[_F$ playing $[_F$ the **guitar**]]].

(8a–c)のそれぞれの文脈に対して，(8d)は適切な返答として機能する．

しかし，例えば先行文が"Is Allan Holdsworth destroying the guitar?!"であるような文脈においては，焦点および主強勢は対比されている動詞*playing*が担わねばならず，(7)の焦点集合では，適切な出力が導かない．Reinhartは，このように，効率的な演算の結果では対応できないような文脈では，強勢移動規則（stress-shift）を適用できるとする．強勢移動規則とは，ある要素の主強勢を他の要素に移す規則である．この規則により，例えば(9)の文脈に沿うように，動詞*playing*に主強勢を担わせることができる．

(9)　Allan Holdsworth is **playing** the guitar.

(9)では，焦点を担えるのは*playing*のみである．無標の位置から焦点がシフトして，*playing*に移動することで，(10)にあるように，焦点は*playing*のみが担い，*the guitar*を含むVP, TPは焦点集合に含まれない．そのため，*playing*以外の要素は弱表示される．

(10)　{playing, ~~is playing the guitar~~, ~~Allan Holdsworth is playing the guitar~~}

そのため，弱表示された*the guitar*は，例えば代名詞化を受けて*it*に置換可能である．

以上，Reinhartの分析を概観した．次節では，(1d)と(2)の対での助数詞を含む省略について説明を与える．

4.　Reinhartに基づく説明

さて，(1d)と(2)のペアについて説明する前に，奥 (2008)によるReinhart (2006)の焦点核についての拡張を簡単に述べておく．奥 (2008: 96)は，Kuno (1995)や神尾・高見 (1998)による(11)の観察を，Reinhartの焦点投射の分析と照らし合わせ，(12)を提案している．

(11)　日本語は，通例，動詞の位置が文末に固定されているので，動詞が旧情報を表す場合は，その直前の要素が文中でもっとも重要な情報を表す．（神尾・高見 1998: 131）

(12)　*Generalized Focus Projection Rule*
The focus set of a derivation D includes all and only the constituents that contain the focus source of D.　（強調は奥による）
（focus source: 英語＝主強勢を持つ要素，日本語＝動詞の直前の要素）

(12)の一般化は，日本語では，文中でもっとも深く埋め込まれる要素が動詞の直前であることから，自然なものだと言える．

これを踏まえた上で，(1d)と(2)の対において，(2)が助数詞を含む読みを持てることについて説明する．Hiraiwa (2016)の想定する名詞句構造を思い出されたい（一部修正して(13)に再掲）．

(13)　[$_{DP}$ [$_{\#P}$ ３冊の [$_{NP}$ キングの 本] #] D]

加えて，名詞句「キング」は，DPの指定部に移動することで属格表示されるというWatanabe (2010)の分析に基づけば，(14)の構造が得られる．

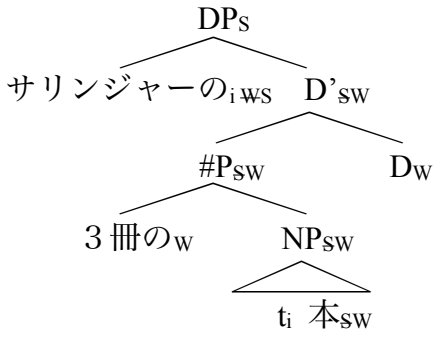
(14)　[$_{DP}$ キングの$_i$ [$_{\#P}$ ３冊の [$_{NP}$ 本 t_i] #] D]

本稿では，(1d)の構造は(14)であると想定する（Watanabe 2010も参照）．

(1d)は，文全体でもっとも深く埋め込まれた要素は，動詞の目的語である「キングの３冊の本」である．そして，この名詞句それ自体も埋め込み構造を持っている．そのため，名詞句全体の焦点核は，その名詞句の中でもっとも深く埋め込まれている要素である「本」ということになる．

続いて，(1d)を先行文とした時の(2)の解釈について考察する．ここで重要な事実として，(1d)と(2)では，(1d)で属格表示されている「キング」と，(2)の「サリンジャー」が対比されているという点である．すなわち，(1d)を先行文とした時，(2)では「サリンジャー」に対比焦点が置かれているのである．ここで，第３節で見た強勢移動規則と，(12)に挙げた奥の一般化から，日本語には，無標の焦点核の持つ焦点を別の要素に移動させる「焦点移動規則」のようなものが存在すると仮定しよう．すると，(2)は次のような構造を持つ（紙面の都合上，簡略化を施した構造を示す）．

(15)



(15)では，無標の焦点核を担う「本」から，焦点が「サリンジャー」へと移動している．この焦点移動により，#P全体がW(eak)表示され，「サリンジャー」と，DP全体のみがS(trong)＝焦点表示される．これにより，助数詞を含む#Pが音声的に弱化され，省略を受けることができる．よって，(1d)が先行文となった場合に，(2)で助数詞の省略を含む意味が義務的に得られる事実を説明できる．

しかしながら，(1d)と(2)のペアにおける(2)について，第1節で述べたように助数詞を含む読みを許さない話者が少なくないというのも事実である．このようなヴァリエーションは，どのようにして捉えられるだろうか．この問題を捉える上で重要になるのが，ReinhartのReference-Set Computationである．第一に，焦点に関してW表示されている要素は，それだけで省略の対象として認可されるわけではない．Reinhart (2006: 153)が述べるように，省略を受ける要素は，先行文脈で言及されている「照応的」表現でなければならない．Reinhart自身が「照応的」という用語を厳密に定義しているわけではないが，少なくとも省略を受ける要素は，先行文脈で言及されているため，話題（topical）の情報を持つと言える．話題要素の典型的な例は，代名詞・代用形（pro-form）である．よって，ここでは，省略を受ける要素は，原理的に代用形に置換可能な要素だという仮説を立てる．また，先行文で導入された要素のうち，代名詞・代用形に置換可能な話題（topic）は，当該の文において焦点集合に含まれるものであると考える（この想定自体は妥当なものであると思われる．というのも，Erteschik-Shir (2007)に従うと，情報構造の原始概念は話題と焦点のみであり，したがって話題に“置換”されうるのは焦点のみだからである．）

これを踏まえて，(2)の先行文である(1d)を再び見られたい．(1d)について，ここで問題にしているDPと関連する焦点集合は，(16)である．

(16)　{本, 3冊の本, キングの3冊の本}

どの焦点が実際に選ばれても，その焦点は(2)の発話の時点では旧情報となる．このうち，「3冊の本」を(2)の話者が焦点として選択したとする．その場合，「3冊の本」全体が構

成素として照応的になる．よって，(15)に挿入可能な要素となる．それに対し，「本」を焦点として選択する話者にとっては，「３冊の」が“遊離”した状態になってしまうため，(2)に助数詞を含む意味を持たせられない．これにより，(1d)と(2)の対において，助数詞を含む意味を(2)に持たせられる話者と，そうでない話者がいるというヴァリエーションも，Reference-Set Computationの観点から適切に捉えられる．このような話者間の差異は，例えばSaito and Murasugi (1990)のような省略分析では捉えられない．斎藤・村杉は，VP省略やスルーシングとパラレルにDP省略を捉え，DP指定部に要素が生起することで補部の省略が認可されるとしている．この分析では，例えば助数詞がDPとNPの間に生起するとすれば，それを含む省略が義務付けられるということは捉えられる．しかしながら，Hiraiwa (2016)が指摘するように，斎藤・村杉の分析には経験的な問題が多く存在する．さらに，斎藤・村杉の分析は，助数詞を含む読みには話者間の揺れがあるという事実を捉えられない．また，斎藤・村杉の分析では，次段落で簡単に述べるような(1a–c)が先行文となった場合の(2)の解釈と，ここでみたような(1d)と(2)のペアにおける(2)の解釈とを，包括的に分析できない．さらに，例えば(1a)や(1b)で強勢が「キングの」に置かれた場合に(2)で助数詞を含む読みが認可される事実も捉えられない．それに対し，Reference-Set Computationを活用する本分析では，これらの事象を包括的に捉えられる．紙面の都合上詳細は割愛するが，詳しくは松本（準備中）を参照されたい．

本発表の主眼である，(1d)と(2)の対における省略領域の可能性についての説明を終えたところで，今度は，なぜ(1a–c)では助数詞を含む省略が許されないのかについて，ごく簡単に述べる（詳細な分析については，松本（準備中）を参照されたい）．(1a, b)が先行文となった時の(2)の解釈については，神尾・高見（1998）やKuno (1995)で論じられているような，日本語の無標の焦点位置に関する考察を援用し，常に助数詞がSを担うとすることで，自然に説明できる．また，(1c)に関しては，省略が「構成素」単位でのみ起こる現象だと想定することで記述できるが，これは原理的な説明とは言えない．なぜ省略が構成素単位でのみ起こるのかについては，今後，話題・焦点といった情報構造的な観点から，より緻密な分析を行う必要がある．また，(1d)が基本語順だとする本分析の想定に基づくと，(1c)はそれからさらに助数詞がかき混ぜられた構造ということになる．ゆえに，(1d)が関係する省略に関しては，かき混ぜという操作の談話的・情報構造的機能について，より精緻な考察を行わねばならない．これらについては，今後の課題とする．

5. 結論

本分析は，省略現象を説明する際の説明項として，「焦点」という，独立して提案されている概念のみを用いているという点において，Merchant (2001)などの*E(llipsis)-feature*（E素性）という素性の存在を想定した分析よりも概念的に優れている．E素性は，（言語が関わる）人間のどの認知能力にも根ざしていない．E素性の存在基盤とは，「省略」という現象が存在するという言語的事実のみである．このことは，E素性が省略の「言い換え」（cover term）であることを示している．

加えて，本稿で扱った問題に，E素性は適切な説明を与えることができない．例えば，(1d)と(2)の対における(2)の読みについての事実を説明するために，DにE素性を付与すると，助数詞は義務的に削除される．しかし，この分析では，話者間の容認度のズレについては説明を与えられない．従って，経験的にも本分析の方が優れていると言える．

Chomsky (1995)をはじめとする極小主義では，言語（特に，狭義の統語論）と他の様々な認知機構との関わりから，言語現象を説明することが求められている．本分析がその基盤を置くReinhart (2006)のReference-Set Computationは，文脈情報を扱う認知機構と狭義の統語論の間にあるインターフェースに主眼を置いた，極小主義的なモデルであり，言語現象に対して原理的説明を与えてくれる．本分析も，それを援用することで，これまで先行研究では見過ごされてきた現象に対して，インターフェースの観点から説明を与えた．

今後の課題として，なぜ助数詞のみの省略・代名詞化は許されないのかについて，話題・焦点などの情報構造的観点から，より細かい現象の分析とともに考察を進めたい．

参考文献

Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Erteschik-Shir, N. (2007). *Information Structure*. Oxford: Oxford University Press.

Hiraiwa, K. (2016). NP-ellipsis: A comparative syntax of Japanese and Okinawan. *Natural Language & Linguistic Theory* 34, 1345–1387.

神尾昭雄・高見健一. (1998). 『談話と情報構造』東京: 研究社

Kuno, S. (1995). “Null elements in parallel structures in Japanese.” In Mazuka, R. and N. Nagai (eds) *Japanese Sentence Processing*, 209–233. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.

Merchant, J. (2001). *Ellipsis: Functional Heads, Licensing, and Identification.* Oxford: Oxford University Press.

Maeda, M. and Daiko Takahashi. (2016). NP-ellipsis in the Nagasaki dialect of Japanese. In M. Kenstowicz, T. Levin, and R. Maeda (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 23, 119–131.

Maeda, M. and Daiko Takahashi. (2017). Further notes on NP-ellipsis in some dialects of Japanese. *Nanzan Linguistics* 12, , 29–45.

松本大貴. (準備中). 日本語の名詞句内における省略の談話的制約. 第23回日本語用論学会発表論文集.

奥聡. (2008). 情報構造とミニマリスト. 文の語用的機能と統語論: 日本語の主文現象からの提言. 1, 83–102.

Reinhart, T. (2006). *Interface Strategies: Optimal and Costly Computations*. Cambridge, MA: MIT Press.

Saito, M. and Keiko Murasugi. (1990). N’-deletion in Japanese: A preliminary study. In *Japanese/Korean linguistics* 1, 258–301. Stanford: CSLI Publications.

Szendrői, K. (2001). Focus and the syntax-phonology interface. Ph. D. Dissertation, UCL.

Watanabe, A. (2006). Functional Projections of Nominals in Japanese: Syntax of Classifiers. *Natural Language & Linguistic Theory* 24, 241–306.

Watanabe, A. (2012). Vague quantity, numerals, and natural numbers. *Syntax* 13(1), 37–77.